

第十七回 玄和全国競書大会優秀作品



秋谷 照浦

審査所感

二〇〇〇年からスタートした玄和全国競書大会も、回を重ねて第十七回目を迎えた。第一回から変わらず、今回も去る十一月二十三日(水)勤労感謝の日に、玄和文化院の二階三階を使用して、午前九時から午後五時まで熱気のこもった審査会が行われた。

当番審査員と審査補助の方を合わせて十九名で一次・二次・そして最終審査へ、粛々と執り行われ、最終審査では何度も何度も同点決戦が各部門で繰り返された。

出品点数は、学生部においては、少子化のおありもあってか、やや減少したが、それでも6.3%の減少に留まり、一般部にあつては、半紙部条幅部共にそれぞれ24%・8.7%の応募増が得られたようだ。それは、一人あたりの出品数の増加も影響しているのかも知れないが、ここ数年の書道人気が上昇傾向を窺い知ることが出来るのではないか。

作品内容については、毎年ることながら、各部門共審査員を唸らせる作品の数々。学生部においては、やはり小さな頃から続けてきたのである。高学年の作品の意欲溢れる作品群に感動。臨書あり、かなあり、篆隸あり、そして紙面いっぱいなのびのびとした

— 玄和書道会賞 —



ケレハー加央里(高三)



森田 裕子



矢島瑠之介(小三)



重光 絆花(小六)



金田莉里花(中二)

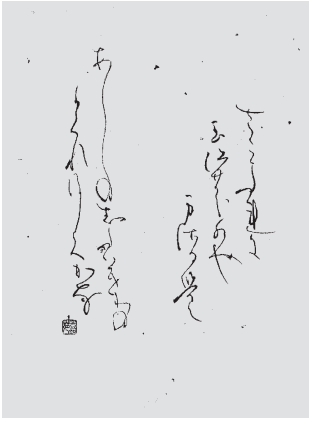
意欲作が、そここに見受けられ、その将来がおおいに期待される場所である。幼年から小学三年生までの作品がもう少し出品されればと思うのは欲ばりか？

一般部は半紙部の作品内容の充実ぶりもさることながら、条幅部作品のレベルの高さには、それこそ唸り、ため息が聞こえんばかりで、複数枚出品しながらもその一枚一枚に完成度の高さが感じられた。一行書きから三行書き、各体の高さで、審査員一人の持ち点が複数でありながら同点決戦の多さに審査は悩まされた。

しかしながら、審査補助の皆さんの手際の良さには感服させられた。見事な連携で、テキパキとこなされ、複雑な集計作業や作品の扱いで、非常にスムーズに進行することが出来た。

玄和五月号あたりまで優秀作品が掲載される予定ではあるが、手前味噌ながら、春浦調と呼ばれる書風を基調とした作品群を目の前にし、『誌上展』ではもったいないね』の声が聞かれたほどで、嬉しく感じられた。次回以降もますます楽しみな審査会であった。

第十七回 玄和全国競書大会
審査委員長 森戸 春濤



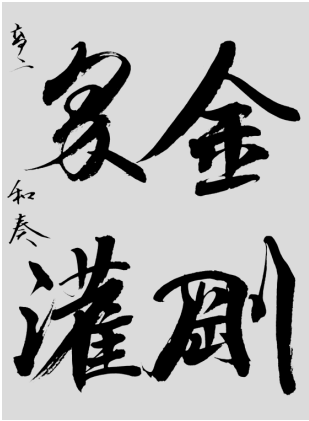
成田 嘉苑



白戸 香風



近藤 嵐光



魚田 和奏(高二)



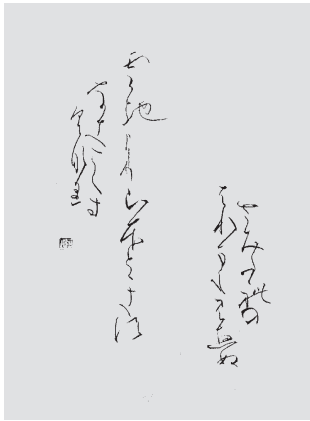
杉谷 太粹(小一)



ユージ 由唯(小五)



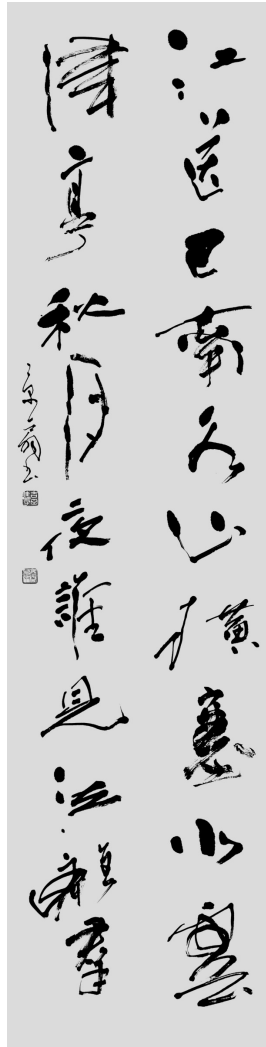
富田 究一(中一)



三林 紅雲



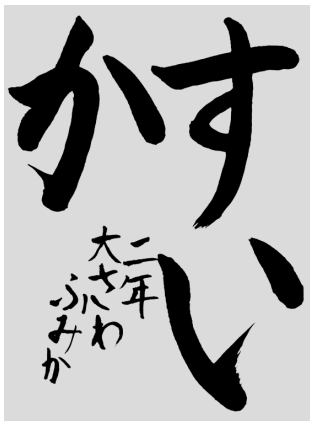
奥田紗利奈(高一)



吉田 景扇



遠藤美代子



大澤 史佳(小二)



田代 初夏(小四)



前島 美帆(中三)